

## 『長秋詠藻』評釈(10)

檜垣 孝

## Notes on "Chosyū Eiso" (10)

Takashi Higaki

## [要旨]

藤原俊成の私家集『長秋詠藻』全歌の評釈。(その10、四二四番から四二七番。)

## 囑累品

## 今以付囑汝等

424 あはれ今日<sup>けふ</sup>の日の末<sup>すま</sup>を聞く<sup>き</sup>ことも譲<sup>ゆ</sup>りおきける印<sup>しるし</sup>なりけり

【題意】「囑累品」の歌。今、あなた達に、この『法華経』を後の世に弘め伝えるようにと付託するという趣意を詠んだ歌。

【歌意】 ああ、今日、『法華経』の教えの一端を聞くことができたのも、釈尊が無数の菩薩たちに付嘱しておかれた結果なのだなあ。

【語釈】 ◇囑累品 「囑累品」は、『法華経』の第二十二品。囑累とは、仏教語として「布教の使命を付与すること」(『広辞苑』)、また「師が弟子に仏法の奥義を伝授して、それを後の世に伝えるよう託すること」(小学館『日本国語大辞典』)だという。この品は、第二十一品の「如来神力品」で、釈尊が、上行菩薩たちを上首とする地涌の菩薩たちに滅後の付嘱を説いたのに続いて、その場集っていた会衆、いわば普通の民衆に説法し、自身の滅後の付嘱を説くという話で構成されている。 ◇今以付囑汝等 今、あなた達に、この『法華経』を後の世に弘め伝えるよ

うにと付託するという意。『法華經』全体では四度にわたって「付囑」の言葉が使われているが、「今以付囑汝等」という句は、「囑累品」の冒頭長行部分に二度にわたって示される釈尊の言葉である。この句を含む冒頭部を引用すると、

爾時釋迦牟尼佛。從法座起。現大神力。以右手摩。無量菩薩摩訶薩頂。而作是言。我於無量。百千萬億。阿僧祇劫。修習是難得。阿耨多羅三藐三菩提法。今以付囑汝等。汝等應當一心。流布此法。廣令增益。如是三摩。諸菩薩摩訶薩頂。而作是言。我於無量。百千萬億。阿僧祇劫。修習是難得。阿耨多羅三藐三菩提法。今以付囑汝等。汝等當受持讀誦。廣宣此法。令一切衆生。普得聞知。

その時、釈迦牟尼は法座より立ちて、大神力を現わし、右の手を以つて無量の菩薩・摩訶薩の頂を摩でて、この言を作したもう「われは無量百千万億阿僧祇劫において、この得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。今、以つて汝等に付囑す。汝等よ、应当に一心に此の法を流布して、広く増益せしむべし」と。かくの如く三たび諸の菩薩・摩訶薩の頂を摩でて、この言を作したもう「われは無量百千万億阿僧祇劫において、この得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。今、以つて汝等に付囑す。汝等よ、當に受持・讀誦して、広くこの法を宣べ、一切の衆生をして普く聞知することを得せしむべし。

(岩波文庫『法華經』、下卷)

となつている。釈尊が計り知れない昔に獲得した悟りの智慧を、後々の世まで絶えることなく弘め伝えるようにと、無数の菩薩たちに付託している場面である。◇みりの末 『法華經』の教えの一端。「み」は「御」で、尊敬の意を表す接頭語。「みりの末」は、「法の末」で釈尊が獲得した悟りの智慧の末端という意。「御法」に釈尊が獲得した悟りという意を込めた「実」を掛けていると考えられる。ここでは『法華經』の教えの一端をさすと考える。寂蓮の百首歌中の一首に、

法聞きて述懐

厭ふべし思ひもすべし驚の山みのりの末に逢ふよりけり (『寂蓮結題百首』、一〇〇)

という作がある。『寂蓮結題百首』は、『新編国歌大観』の解題によれば、文治三年(一一八七)成立の慈円の「詠百首倭歌」と同じ時期の詠歌であるとするので、倭成歌よりは後のものである。「みりの末」という句形は、『千載集』巻第三、夏歌の部に入集した、俊頼の、

瞻西上人雲居寺の房にて、未飽郭公といへる心をよめる 源俊頼朝臣

などてかく思ひそめけん時鳥雪のみ山のりの末かは(一九二)

が最初か。ただし、俊頼歌の「のりの末」は、『涅槃經』中の雪山で羅刹(実は帝釈天)が説いたという雪山偈の後半部をさしている。俊頼歌の影響になった倭成歌としては、『倭成五社百首』における「日吉社百首和歌」の冬十五首中の、

雪

雲ふかし雪のみ山やこれならんみのりの末も絶えじと思へば(四六〇)

が考えられる。◇譲りおきける 釈尊が『法華経』を後の世に弘め伝えるようにと付託しておいたという意。◇印なりけり 結果なのだ。あ。この「印」は、果報、報いの意で、釈尊が、計り知れない昔に修習した悟りの境地を、無数の菩薩たちに付嘱したその結果、現在『法華経』を弘め解説する人がいて、衆生がそれを聞き得たということを指している。仏教に関わつての結果を意味する「印なりけり」は、俊成歌より後のものであるが、『新拾遺集』巻第十七、釈教歌の部に入集している、

善悪不二邪正一如のころを

前大僧正公澄

よしあしはひとつ入江のみをつくしふかき御法の印なりけり(一四八九)

という作が検索出来た。

【評】 釈尊が、計り知れない昔に修習した悟りの境地を、無数の菩薩たちに『法華経』を説き、後の世に弘め伝えるようにと付託をしておいた。その結果、現在でも尊い『法華経』を聴聞できるのだという、その喜びを詠んだもの。

「(みのりの末を) 聞く」というのは現在の衆生が聞くことを指し、「譲りおきける」というのは昔、釈尊が説法をし付嘱をしたことを指すので、一首の中で主語が変わっている。また「譲りおきける」は釈尊の行為であるが尊敬語は用いられていない。【歌意】には、「付嘱しておかれた」と尊敬を込めて訳してみたが、現代語訳にくい和歌であるといえよう。

葉王品 即往安楽世界

425 頼むかな露の命の消ゆる時蓮の上に移し置くなる

【題意】 「葉王品」の歌。(命が終われば) そのまま極楽世界へ往生するという趣意を詠んだ歌。

【歌意】 『法華経』を受持すれば、露のような儂い命が終わる時、そのまま極楽の蓮の上に生まれかわるということだが、そのことを頼みに思うことですよ。

【語釈】 ◇葉王品 「葉王品」は、「葉王菩薩本事品」を略したいいい方で、『法華経』の第二十三品。この品では、現在種々の神通力でもって衆生を教化し続けている葉王菩薩の過去世の物語が披瀝されている。すなわち、日月淨明德仏の時代にその説法を受けていた一切衆生喜見菩薩という菩薩が、苦行精進の後に現一切色身三昧という力を得、仏と『法華経』を供養するために焼身供養を行ったこと。また、後に淨徳王の子として生まれ変わった時代にも、仏の滅後に自らの臂を燃やし供養をしたのだった。仏から滅後の付嘱を受けたこの菩薩こそ現在の葉王菩薩であ

るといのである。◇即往安樂世界（命が終われば）そのまま極樂世界へ往生するという意。この句は、釈尊が薬王菩薩の本事を語った後に、さらに、『法華経』が諸経の王であることを説き、またこの経典を聴聞し受持することの功德には、女人でも命が終わるときには阿弥陀の浄土に生まれると説く長行部分に出てくる。この一句を含む前後の部分を用いると、

若如来滅後。後五百歳中。若有女人。聞是經典。如說修行。於此命終。即往安樂世界。阿彌陀佛。大菩薩衆。圍繞住所。生蓮華中。寶座之上。不復爲。貪欲所惱。亦復不爲。瞋恚愚癡所惱。亦復不爲。憍慢嫉妬。諸垢所惱。得菩薩神通。無生法忍。

若し如来の滅後、後の五百歳の中にて、若し女人有りて、この経典を聞きて、説の如く修行せば、ここにおいて命終して、即ち安樂世界の阿弥陀仏の、大菩薩に圍繞せらるる住処に往きて、蓮華の中の宝座の上に生れん。復、貪欲のために悩まされず、亦復、瞋恚・愚痴のためにも悩まされず、亦復、憍慢・嫉妬・諸の垢のためにも悩まされずして、菩薩の神通と無生法忍とを得ん。

（岩波文庫『法華経』、下巻）

となつている。歌題としては掲出一句だけなので、「即ち安樂世界に往く」と訓むと考える。女人往生を説く点と、『法華経』の教えの中に浄土教の教主阿弥陀仏の浄土への往生を説く教えがある点は興味深い。◇露の命の消ゆる時 露のような儂い命が終わる時「露の命」は、人の命は、すぐに消えてしまうのが道理の自然の露と、同じであるとした表現。◇蓮の上に移し置くなる 極樂の蓮の上に生まれかわるといふことだといふ意。「蓮」は阿弥陀仏の浄土すなわち極樂の蓮。「移し置く」は、極樂に往き蓮の上に生を置く、つまり往生すること。「なる」は伝聞の助動詞「なり」の連体形。先に引用した経文中の「生蓮華中。寶座之上。」の部分で表現したもの。浄土教的な教理としての極樂の蓮の上に往生すると詠んでいる歌としては、『拾遺集』巻第二十、哀傷の部に入集している、

市門にかきつけて侍りける 空也上人

一たびも南無阿弥陀仏といふ人の蓮の上にのぼらぬはなし（一三四四）

などがよく知られたものであろう。後のことになるが、崇徳院の死後、院の長歌と反歌が俊成の許に送られてきたのに対し、俊成は返歌をしており、その長歌の反歌に、

先立たむ人は互ひに尋ね見よ蓮の上に悟り開けて（新編大観『長秋詠藻』下雑歌、五八四）

と詠んでいることが知れる。

【評】「薬王菩薩本事品」に説く女人往生の教えを、男女に拘わらない気持ちとして、『法華経』の教えの偉大さを根拠として、この命が終わる時に極樂往生することを頼みとすることだよという願いを込めた歌。

和歌大系『長秋詠藻』は、『拾遺集』巻第二十、哀傷の部に入集している、

左大将濟時、白河にて説経させ侍りけるに 実方朝臣

今日よりは露の命をしからず蓮の上の玉とちぎれば(一三四〇)

を「依拠歌」と注している。「露の命」と「蓮の上」が同時に詠み込まれた歌としては、俊成と同時代の源資賢の作に、

蓮をよめる

大納言資賢(源資賢)

愚かにも露の命を惜しむかな蓮の上に居るを見ながら(『月詣集』巻第六六、月附恋下、五一四) を見ることが出来る。

妙音品

及衆難処 皆能救済

426 荒き海きびしき山の中なれど妙なる声は隔てざりけり

【題意】「妙音品」の歌。(妙音菩薩は)多くの難所で苦しんでいる衆生をも、全てよく救済するという趣意を詠んだ歌。

【歌意】荒々しい海や険しい山の中のような所であっても、妙音菩薩が『法華経』を説く美しい声は、全ての衆生にわけへだてなく届き、救済するのであったなあ。

【語釈】◇妙音品 「妙音品」は、「妙音菩薩品」を略したい方で、『法華経』の第二十四品。この品では、淨華宿王智如来の説法する東方世界の淨光莊嚴国に住む妙音菩薩が娑婆世界に来て、過去生において修行を重ねて得た三昧の力でもって、三十四身に身を変えて衆生を救うという話が展開される。◇及衆難処 皆能救済 (妙音菩薩は)多くの難所で苦しんでいる衆生をも、全てよく救済するという意。この二句は、「妙音菩薩品」末尾近くの長行部分に出てくる。この二句を含む前後数句を引用すると、

華徳。汝但見妙音菩薩。其身在此。而是菩薩。現種種身。處處爲諸衆生。説是經典。或現梵王身。或現帝釋身。(中略)或現天龍夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等身。而説是經。諸有地獄。餓鬼。畜生。及衆難處。皆能救済。乃至於王後宮。變爲女身。而説是經。

華徳よ、汝は、但、妙音菩薩のその身はここに在りとのみ見るも、しかもこの菩薩は種種の身を現わして、処処に諸の衆生のために、この經典を説けり。或は梵王の身を現わし、或は帝釈の身を現わし、(中略)或は天・竜・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・

人・非人等の身を現わして、この経を説き、諸有る地獄・餓鬼・畜生及び衆の難処は皆、能く救済し、乃至、王の後宮においては変じて女身と為りて、この経を説けり。

(岩波文庫『法華経』、下巻)

となつてゐる。中略部分は、その前後の「梵王」「帝釈」と「天」「竜」「夜叉」などを含めて、妙音菩薩が衆生を救済するために変身する三十四身を列挙した部分である。歌題部分の前後は、妙音菩薩が地獄道・餓鬼道・畜生道その他多くの世界で苦しんでいる衆生を、『法華経』を説いて全てよく救済すること、王の後宮においては女身になって『法華経』を説くのであるという意となつてゐる。◇荒き海 荒々しい海。衆生が苦しんでいる場所の一つとして具体的に表現したもの。「荒き海」という句形は俊成歌以外には見出せなかつた。◇厳しき山 険しい山の中。同じく衆生が苦しんでいる場所の一つとして具体的に表現したもの。同時代の西行に、

巡り逢はんことの契りぞ有りがたき厳しき山の誓ひ見るにも(『山家集』下、一三七〇、詞書略)

という作があり、かつて空海が修行をした我拝山を「厳しき山」と詠んでいる。ただし、俊成歌の「厳しき山」は、衆生が苦しむ場所を比喻表現したもので、現実的具体的な表現としての西行歌のそれとは異なる。◇妙なる声は(妙音菩薩が『法華経』を説く)美しい声は。「妙なる声」は、『赤染衛門集』の法華経二十八品歌中の、

妙音品

ここにのみありとやは見るいづくにも妙なる声に法をこそとけ(四五〇)

という歌に詠まれたのが早い例で、俊成もこの歌を意識して詠んでいると思われる。同時代の作では、『寂蓮法師集』の「法華経廿八品歌結縁のため人人よみける中に」という詞書を持つ一連の作中の、

妙音品、世事可忍不

あはれとや妙なる声に伝へけんうき世の中の忍び難さに(一〇七)

という歌や、『拾玉集』第二、「詠百首和歌」中の「妙音品」歌の二首目に、

不鼓自鳴

驚の山妙なる声のゆかりには風ふかねども嶺の松風(二五二七)

などが見出される。何れも「妙音菩薩品」歌であるので、この品を詠む場合は、「妙なる声」がキーワードの一つであると考えてよいであろう。

【評】妙音菩薩が法を説く美しい声は、全ての衆生にわけへだてなく届き、救済するのだったなあと感慨を込めて述べ、『法華経』を説く妙音菩薩を讃めた歌。

妙音菩薩は衆生を救済するために三十四身にも変身する神通力を修行の功德によつて身につけた菩薩であり、現世利益を願う衆生にとつては、

同じく三十三身に变身して衆生の願いを叶える観音菩薩とともに、頼もしい仏であったということがわかる歌でもありと考える。

『新統古今集』（巻第八、釈教歌、八六七番歌、第四句「たへなる法は」）に入集。「たへなる法は」でも意味は通じるが、「妙音菩薩品」の和歌であるので、妙音菩薩が『法華経』を説く美しい声と理解できる「たへなる声は」の方が理にかなっているといえる。

### 普門品

#### 弘誓深如海

427 誓ひける心のやがて海なれば人を渡すも煩ひもなし

【題意】 「普門品」の歌。（観音菩薩の衆生を救おうという）おおいなる誓いは海のように深いという趣意を詠んだ歌。

【歌意】 衆生を救おうと誓った心はそのまま海であるので、衆生を済度することに何の難しいこともないのだなあ。

【語釈】 ◇普門品 「普門品」は、「観世音菩薩普門品」を略したいい方で、『法華経』の第二十五品。この品では、西方世界の観世音菩薩が、娑婆世界の衆生の悩み（世音）を観て救うこと、その方途として様々な姿（三十三身）を自由自在に現して、衆生を救うことを説く。「普門」は、「観世音菩薩が、広く衆生に救いの門を開いていること。」（小学館『日本国語大辞典』）をさす。三十四身に变身して衆生を救済すると説く妙音菩薩の話が展開する前節の「妙音菩薩品」といわばセットをなしている品である。◇弘誓深如海（観音菩薩の衆生を救おうという）おおいなる誓いは海のように深いという意。「弘誓」は、「衆生を済度して仏果を得させようとする広大な誓願」（小学館『日本国語大辞典』）の意で、ここでは、いはゆる四弘誓願（衆生無辺誓願度、煩惱無量誓願断、法門無尽誓願智、仏道無上誓願成）をさす。この句は、無尽意菩薩が観音菩薩のその名の由来を釈尊に問うのに釈尊が応えたもので、「普門品」後半に置かれた偈頌の部分に出る。この句を含む前後数句を引用すると、

世尊妙相具 我今重問彼 「世尊は妙相を具えさせまえり われ今、重ねて彼を問いたてまつる

佛子何因縁 名爲觀世音 「仏子は何の因縁にて 名づけて観世音となすや」と。

具足妙相尊 偈答無盡意 妙相を具足したまえる尊は 偈をもつて無尽意に答えたもう。

汝聽觀音行 善應諸方所 「汝よ観音の行の 善く諸の方所に応ずるを聴け。

弘誓深如海 歴劫不思議 弘誓の深きこと海の如く、劫を歴るとも思議しえざらん。

侍多千億佛 發大清淨願 多千億の仏に侍えて 大清淨の願を發せり。

我爲汝略説 聞名及見身 われ汝が爲めに略して説かん 名を聞き及び身を見て

心念不空過 能滅諸有苦 心に念じて空しく過ぎざれば 能く諸有苦を滅せん。  
 假使興害意 推落大火坑 假使、害う心を興して 大いなる火坑に推し落さん  
 念彼觀音力 火坑變成池 彼の觀音の力を念ぜば 火坑は變じて池と成らん。  
 となつてゐる。

(岩波文庫『法華經』、下卷)

觀音菩薩が衆生を救おうと誓つた心はおおいなる海の如くであること、菩薩の行が衆生の悩みを救うさまを、觀音の力を念ずれば諸々の苦惱を滅するであろうことを述べ、さらに、ある人を殺そうとして火の燃え盛る穴に落したとしても、觀音の力を念ずればその穴が池となつて助かるのであるというように、具体例をもつて示した部分である。以下に続く偈頌でも、觀音の力を念ずることで種々の苦惱から救われる具体例が掲出されてゐる。

なお、底本の歌題は「弘誓深如海」であるが、底本を同じくする古典大系「長秋詠藻」の翻刻は「弘誓源如海」となつてゐる。第一類本を底本とする全歌集『長秋詠藻』および、第三類本を底本とする新編大觀『長秋詠藻』と和歌大系『長秋詠藻』なども、いずれも「弘誓深如海」と翻刻してゐて、また、大正新脩大藏經の『法華經』でも「弘誓深如海」であるので、底本(私家集大成本)のとおりでいいのだと考える。ただ、評釈に使用してゐる『長秋詠藻』の底本は私家集大成本であるが、その私家集大成本の底本である宮内庁書陵部蔵『長秋詠藻』(五〇一・一七二)の、国文学研究資料館のマイクロフィルムによる紙焼写真本では、「深」のくずし字は「源」とも読める字形であることも確認出来、翻刻に際して「深」ではなく「源」とした可能性もあると考えられる。◇心のやがて海なれば(觀音菩薩が衆生を救おうと)誓つた心はそのまま海であるの意。「やがて」は、副詞で、即ち、そのままの意。歌題「弘誓深如海」の「如」は、助動詞で、ような意なので、海のように深いというのが本来の意であるが、俊成は觀音菩薩が誓いを立てた心の弘さが即ち海であると比喩したのである。「心のやがて」の句形は、同時代の西行、慈円、源通親の和歌にも見ることが出来る。作歌時期はいずれも俊成歌より後と考えるが、

うらうらと死なんずるなと思ひとけば心のやがてさぞとこたふる(『山家集』下、雜、一五二〇、詞書略)  
 月を見る心のやがてうれしきは闇路の末を思ふなりけり(『拾玉集』第一、五三三、詞書略)

思ひたつ心のやがて變はらずはなにかうき世をそむかざるべき(『高倉院昇霞記』、五三、詞書略)

の三首がそれである。◇人を渡すも 衆生を濟度することに。「渡す」は、例えば海や川のこちらの岸(此岸つまり迷いの世界)からあちらの岸(彼岸つまりさとりの世界)へ渡すという意で、救済する意となる。◇わづらひもなし 何の難しいこともないのだなあの意。「わづらひ」は動詞「わづらふ(煩)」の連用形、「も」は助詞で、「種々の連用語を受けて、主題を詠嘆的に提示する」(小学館『日本語大辞典』)という働きをする語で、ここでは、「難しく(ない)」「ことを詠嘆的に表現したものと考える。「なし」は、形容詞「なし」の終止形、「も」を伴つた形で否定の意を表わ



す。「わづらひもなし」という句は当該歌しか見出せなかつたが、「もなし」と表現する歌は、年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし(『古今集』巻第一、春歌上、五二、詞書略、藤原良房)以下多く見出される。

【評】 歌題のいわゆる直喩表現「如」を暗喩表現「やがて海なれば」へと転換させ、観音菩薩が衆生を済度することに何の難しさもないと詠んで、『法華経』の教えの偉大さを讃めた歌。

藤原家隆の和歌に、当評釈の四〇三番歌で取りあげた、

弘誓深如海

渡すべき誓ひの深き冬の海は氷も霜も結ばざりけり(『壬二集』巻中、一二四二)

がある。当該歌と同じ歌題であることを思えば、「渡す」「誓ひ」「海」などの語の使用に影響関係が想定できる。

なお、西行の『聞書集』中「法華経二十八品歌」の「普門品」の和歌、

弘誓深如海、歴劫不思議

おしてるや深き誓ひの大綱に引かれむことの頼もしきかな(二二六)

も、俊成当該歌と一句重なつた形の歌題となっている。「弘誓深如海」に対応するのは第二句・第三句で、観音菩薩のおおいなる誓いを漁師の用いる「大綱」という具体物で提示し、その綱にすくい取られる喜びを詠んでいる。ただし、「歴劫不思議」の句は直接的には和歌には取り込まれていないように見える。この句は、観音菩薩の誓いの偉大さを別な角度から説明しているものと考えられ、和歌として特に表現しなくてもよいのかもしれない。

『夫木和歌抄』に入集(巻第卅四、雑部十六・釈教、一六二五二)しているが、歌題が、「弘誓深如海、歴劫不思議」となっていて、当該歌より一句多く、前述した西行歌の歌題と同形である(歌句に異同は見られない)。西行歌の場合と同様、「歴劫不思議」は直接的には和歌に表現されていないので、『長秋詠藻』の本文のように一句の歌題でよいと考える。

#### 注

- (1) 「大菩薩」の「ママ」は楳垣が付したものの。原漢文は「大菩薩衆」とある。
- (2) 当評釈は、私家集大成本を用いていること、当評釈(1) および(8)の凡例参照。

- (3) 『くずし解読字典』(若尾俊平氏他編、柏書房、昭和五一・一二)、参照。
- (4) 西行歌の「やがて」については、拙著『俊成久安百首評釈』(武蔵野書院、平成二一・一)、六八番歌の【評】参照。
- (5) 『長秋詠藻』評釈 (6) (大東文化大学紀要〈人文科学〉、第四七号、平成二二・三) 四〇三番歌の【評】、参照。